

【講演記録】

近代都市動物園の効用*

An Effect of the Modern Zoo in the City

正 田 陽 一**

Youichi SHOUDA

正田と申します。牛の博物館の名誉館長という肩書きを頂戴し、また東京動物園協会の理事をさせていただきます。小森さんからこの会で話をしてもらえないか、というお話がありまして、すぐ博物館学会の方に聴いていただくのだったら、私の考えている動物園というものの役割、有効性というものをお話させていただこうと決めたわけでございます。

最近、動物園不要論などという暴論が一部にございまして、私は文化国家にとって動物園というのは必要不可欠な施設であると考えています。もちろん私はそこに収容されている動物達が、ほんとになんの犠牲もはらっていないとは考えておりません。ある程度、動物の犠牲の上になりたっている施設ではありますけど、これはやはりホモ・サピエンスたる人間がどうしても持たなくてはいけない施設なんだというふうに考えております。動物たちのある程度の犠牲というものは、その有用性によって担われているのだ、そういうことで、今日は「近代都市動物園の効用」という題で、お話をさせていただきます。自然科学系の方は今日のお集まりではむしろ少数派なのかもしれませんので、退屈をなさってもいけないと思ってスライドを用意しました。そのスライドを見ながらお話をさせていただきます。

要旨にも書きましたが、近代動物園の果たすべき社会的な役割として、娯楽—エンターテインメントですね、レクリエーションといってもいい—が一つあります。それから2番目が教育。これは生きている動物を展示することによって博物館と同じように、社会教育施設として役立っているという教育

現場です。3番目に研究。これは、生物学的、動物学的な研究。4番目として、最近やかましくいわれるようになりました希少動物の保護。この4つの役割が並列してあげられるのが通常でございます。

ただ私は動物園という施設を考えたときに、その4つの役割が横並びになっているというのはどうもおかしいような気がしております。動物園というのはご存知のように生きている動物を展示してお客様に見ていただく、この展示するということがあるわけですから、たとえば野生動物の保護を考える時に、観客の視線によるストレスを受けるという、大変避けなければならないしくみをもっているわけです。私はやはり、これは動物園というのは来園者に展示をするという役割を考えれば、社会教育の施設であるということ、これが一番中心にすえられるべき役割であるはずなんです。動物を精神的にも肉体的にも健康に飼育しようと思えば、それはどうしてもそこに研究の基盤がなければ、ただ漫然と飼うということではできないわけです。ですから、研究はもちろんそのために必要です。そして教育というと、とかく堅苦しいイメージを抱いてしまうのですけれど、本来教育というのは、興味を引き出すということが語源になっているのだそうですが、そういう意味で、「知るは楽しみなり」という言葉そのままに、珍しい動物を観察することの喜び、その中から教育的な効果があがっているという、これはもう、楽しみと教育は表裏一体のものであろうと思うんです。それから4番目の役割というのは、これは本来動物園が担うべきものではないと私は考えているんです。ただ、野生動物を飼育するというそのノウハウは、動物園

* 平成9年6月7日 全日本博物館学会第23回総会・特別講演

** 東京大学名誉教授・前沢町立牛の博物館名誉館長

にしか今までなかった。従って、最近のように絶滅に瀕している動物を一時的に緊急避難させて、生息地から人間の管理下に移して、そこで保護して繁殖して増やして、できればまたそれを自然に戻そうというような仕事を考えたときに、動物園以外にそれを引き受ける適当な施設というものがなかった。緊急を要する事態ですから、これは動物園が手を貸さなければならないということは当然なわけです。たとえば適切かどうかわかりませんが、私は自衛隊がPKOに派遣されるといった時に、周辺国家の気持ちとか、そういうものを考慮して、反対論が非常に多くありました。国際協力の必要性は誰もが認めているながら、それに応えるだけの行動のとれる組織というものがその時日本はなかったわけです。従って、一部の知識人たちが、これは別な組織を作ってそこが動くべきであるといったような、間に合うわけのないようなそんな意見が出たのを記憶しております。動物園もその時の自衛隊と同じような形で、他にやれる人がいないから、ということで手を貸すことにならざるをえない、こんなふうに考えております。動物園が希少動物の保護に果たす役割についても、今日ちょっと最後に触れたいと思っておりますが、それは、動物園の本来の使命である展示というものからは離れて非公開の場で動物園はその仕事をすべきである、そうでなければ希少動物の保護をうまく続けていくことはできないと思っています。今、ツシヤママネコの保護ということに博多の動物園が協力しております。それはやはり非公開のところに飼育施設を作っておりますし、米国でも、ロスアンゼルス動物園のカリフォルニアコンドルの保護、これも大変すばらしい成績をあげているのですが、これもやはりお客様にその動物は見せません。それは当然のことだと思います。

いよいよ本題に入らせていただきますが、最初に古い新聞の記事をちょっと読んでみます。「トラでもゾウでものびのび遊ばす/それぞれ自然的生活に」とある2段組みの見出しの記事です。

「これまでの上野動物園は鉄骨いかめしい檻づくりで、一見動物虐待園の感があり、見る人にも良い感じを与えないので、すべての動物にもっと自然的生活を与えることが方針となっている」という記事なんです。現在の動物園もこれをまさに目指してい

るわけですが、この記事の出た、朝日新聞の日付を見てみますと、昭和2年3月31日の朝刊です。今からちょうど70年前に朝日新聞に出ております。私がなぜこんな記事を見つけたのかと申しますと、昭和2年3月31日というのは私の生まれた日でございます(笑)。私は自分が生まれたとき日本でどんなことが起こっていたのだらうと図書館へ行って縮刷版を調べましたら、たまたまそこに昭和初期の上野動物園の改造計画がでていました。上野動物園は大正13年に宮内庁から東京市へ下賜されました。恩賜上野動物園という名前は現在でも使われていますが、その恩賜動物園を近代的に模様替えをしようという昭和初期の大改造計画がたまたま発表になった日が私の生まれた日だったのです。ただ、この記事を読みまして、私、ちょっとおかしいなという感じがしたのは、私が小学生の頃に見た上野動物園の猛獣舎(それはそのトラでもゾウでものびのび遊ばすはずの猛獣舎をみておったわけですが、)その猛獣舎が、ライオン、トラ、ヒョウ、ジャガーといった、ビッグキャットといわれている大型のネコ科の動物の檻が円形に配列されていて、真ん中に寝部屋を見ることのできる通路が通っており、それが管理通路もかねています。一区画というのは決して広くありません。ちょっとのびのび遊べたかどうか大変疑問な狭い檻、しかも鉄の檻で床がコンクリートで、とても自然的生活がおくれていたとは、私には思えません。少し朝日新聞の表題は、羊頭を掲げて狗肉を売っているような感じがするな、という疑問があったわけです。

しかし、それは当時に見れば、これでも以前のトラ舎よりもはるかにのびのびと暮らせる施設になっていたわけです。大正末期から昭和のはじめまでありました猛獣舎は、木造で、その建物のなかに鉄の檻があって、まさに「動物虐待園」です。それから見れば、私がこれではのびのびできないだろうと思ったトラ舎も十分に前よりはよくなっていたわけです。その私の子どもの頃見た猛獣舎は昭和47年でしたか、ちょっと年号は定かではないですが、新しいトラ舎ができて、この新しいトラ舎もやはり鉄の檻ごしにトラを見るんですけども、背景に偽岩があって、そこに滝が落ちている。それから床、運動場は土で、緑の植栽もされています。そのなかには爪とぎ用の木もありまして、トラは非常に住み

心地が良さそうになっています。このトラ舎は、更に改造されました。一昨年、ゴリラとトラの住む森という施設ができて、これはお客さんはガラス越しにトラを見る。トラは非常に広い運動場に、池もあり、竹藪もあり、いかにも自然的生活を楽しんでいるようにお客様には見ていただける。ちょっと後ろの芸大の校舎が目障りなので、あそこに緑の森でも作って、隠してしまったらという贅沢な希望があるのですが… (笑)。「写真1」トラが生活をしている場というものの、原産地の周辺環境の中でトラを見ることができる、こういうすばらしい施設にまで変わってきたわけです。つまり昭和2年に計画されたトラを自然的環境の中でのびのびと遊ばせようという、それは私の判断からいけばやっと70年後にそれが実現されたという感じがしております。こういう動物を見せる、その見せ方というものは日進月歩で、来園者、利用者の望みも高くなると同時に動物園側もそれに応えようと改良に力を入れる。「動物園には完成はない」という言葉があるのだそうですが、そういう意味でいいますと、私はトラを見せるものとして今これが一番すばらしい施設だというふうに思いますけれど、この次に上野動物園が作りかえられるときには、また何か新しいもう一歩進んだ形になる、動物園には完成がない、常に向上して行く、ということを私は思います。せいぜい長生きして、この次のトラ舎はどんなものになるのかを見届けたいと思っているのですが、何年先になるのかわかりませんからはたしてできるかどうか。

今日、動物園はもっと動物を見せる、見せ方に工夫をすべきだし努力をすべきです。そこで動物園の展示の仕方を世界のいろいろな動物園で見ていき

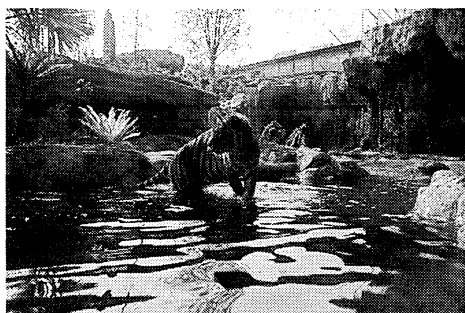


写真1 上野動物園の「トラの森」

いと思います。今トラの見せ方、古い猛獣舎の写真をお見せしました。あの猛獣舎は、ネコ科の大型猛獣をならべていました。アフリカのライオンも、アジアのトラも、アメリカのピューマも、南米のジャガーも、そういうものを全部原産地と全く関係なく、分類学的に食肉目ネコ科ということで並べてある、つまり系統分類学的な展示—これが動物園の動物の配置を考える最初に取りられたシステムです。クマの檻の並びには、ホッキョクグマもいれば、マレーグマもいる、イヌ科の動物はアフリカのリカオンもいれば北方系のシンリンオオカミなどもある。分類学的に近縁なものを並べる。私はこれは見る方にとって興味深い展示、配列だ、と思っています。たとえば、アフリカにいるからシロサイ、クロサイはこっち、アジアのインドサイ、スマトラサイは別の場所というのでは、近縁の動物を比較して見るということができない。ただその場合、やはり違った考え方の人も当然出てきます。それは次にお話しますけれども、私はその比較して見せるということから言えば、そういう分類学に基礎をおいた配列というものの意味を大変高く評価しています。私が非常に好きな動物園のパリのヴァンサン公園にできたヴァンサン動物園では、クマが3種類、隣り合わせの三軒長屋に住んでいます。いちばん端には、コディアックベアーといいまして、コディアック島という一番北にすんでいるヒグマの亜種です。その隣には、同じヒグマですがヨーロッパ産のブランウンベアー。そしてその隣には一番南にすむシリアのシリアグマというクマがいます。この3種類とも全部ヒグマなんです。ベルグマンの法則というのがありまして、これは同じ種類の動物が緯度を異にして分布している時に、緯度の高い地方に住む亜種の体が大きくなる。これは緯度が高くなりますと気温が下がります。そうすると体温の産生というのは、体の大きさで決まてきますが、体温の消失は体表面積の増加によって大きくなる。そうすると寒い地方の動物は体を大きくしたほうが体温の維持に都合がいい。そのために緯度の高い地域の動物の体が、亜種の場合です、大きくなる。これは中学の動物の教科書にも出てくる法則ですが、それを動物園で目の前に証拠を突きつけてみせる、これはやはり分類学的な基盤の上になつた展示でなければ実現できないことじゃ

あないか。大変私は、ヴァンサーヌの動物園のヒグマの展示に感心したわけです。

パリには、ジャルダン・デ・プラントという現存する動物園では世界で2番目に古い動物園がございます。ご覧のようにこれはゾウやサイの入っている厚皮獣舎で、皮膚の厚い動物を収容する、一見動物園の檻というよりは銀行か何かの建物を思わせるような非常に風格のある建物です。[写真2]これが近代動物園として機能しなくなったというので、これは古い動物園の見本として市内に残しておいて、そして市外に新しい、無柵放養式といって檻ではなくて、モート、堀でお客様と動物を隔てるという形のヴァンサーヌ動物園ができました。フラミンゴの奥にはレイヨウやシマウマの姿も見えます。[写真3]非常に自然的な景観のなかで動物がのびのびと生活しています。ジャイアントパンダの檻は、ちょっと見ると来園者とパンダの間に全く柵がないように見えます。実は芝生がずっと向こうまで続いているのではなくて、途中でモートが入るのですけど、そのモートが傾斜をうまく利用してほとんどそこになくように作られています。お客さんのいる場所は砂利がひいてあって、その奥に芝生がずっと続いている途中に、間にうまく掘割を隠してある。

オカピというキリンに近い動物は、ジャングルに住んでいるのですが、その運動場はほとんどが木陰の樹林帯の風景を作っているのです。遠くのほうに日当たりのよい芝生が見えていて、オカピは暗いところに一日過ごししながら、時々明るい芝生のほうにも姿を見せる。自分の行きたい所へ行行って、そこで一日をすごせるという、やはり動物の気持ちをよく考えた、いい展示だと思います。

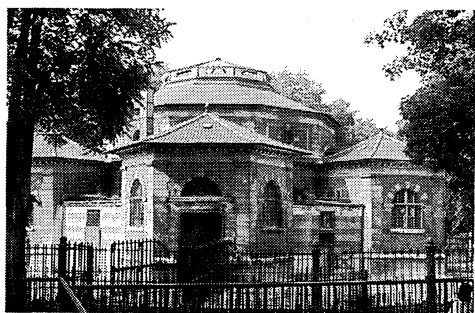


写真2 パリ動物園の古い厚皮獣舎

カナダのカルガリー動物園に行きましたら、こんな檻がありました。檻の鉄柵というのは普通はまっすぐな鉄の棒が組み合わさっています。中に、鳥がいるんですが、檻は非常に装飾的に鉄の棒を一種の木の枝のような感じというのでしょうか、曲げてあるわけです。中にいるのは、ヤシオウムという大型のオウムなんですけど、それを見せるのに檻をこんなふう工夫しています。これも非常に私は面白いと思いました。

今、系統分類学的な展示、それを私は大変評価していると申しましたが、これに対して一つ非常に新しい方式がドイツで考え出されました。

それはドイツのミュンヘンのヘラブルン動物園で、その動物園で、はじめて動物地理学的展示というものはじめたわけです。今度は、分類的に近いものを並べるのではなくて、アフリカの動物はアフリカ地区、オーストラリアの動物はオーストラリア地区というように、動物の分布、つまり動物地理学的に動物を並べてみせようという方式です。これはアフリカ地区のレイヨウなのですが、全然別なところにはアジア地区のシーロー（かもしか）がいたりします。非常に新しい考え方の動物園の設計だということで、ひところ非常に評判になりました。現在ではこういう配置を採っている所はたくさんあります。たとえば東京の多摩動物公園、あれは北園と呼ばれている地区はアフリカ産の動物だけが集



写真3 新しいパリ動物園のフラミンゴ舎

まっています。また南園と呼ばれている地区にはアジアの動物たち、奥のほうにはオーストラリア地区の動物たちが、コアラとか、ワラビーとかそういうものがまとめて飼われています。

動物の分布というものに従って区域分けをしている、当初大変評価を得た配列方法な

のですが、これに非常に不満を漏らされた方がありまして、それは慶応大学の寄生虫の小泉丹(まこと)という先生、小泉先生はもう亡くなった古い先生ですが、動物園に関心が深い方です。小泉先生は大変期待してミュンヘンのヘラブルン動物園にいらっしゃったそうですが、ところが、小泉先生が帰国してお書きになった本に、動物を生息地域によって分けているとは言っても、飼われている周辺の植物がいずれも北ヨーロッパの植物で、全然オーストラリア地区も南アメリカ地区もそういった点で変化がない。あれではなんのために動物地理学的に展示をやっているのかわからない、という非常に厳しい批判を岩波から出された「動物園」という本の中に書いてらっしゃいます。

確かに、アジアの野生の動物も、北アメリカのジャコウウシも、それから南アメリカのグアナコ、こぶのないラクダですね。こういうものを比べて見ても、いずれも全く入れ物に変化がない。しかもこういう風に並べてしまいますと、類人猿でゴリラとオラウータンは全然遠い離れたところに飼われることになる、管理の上から言っても、系統分類だと似たような動物が一個所に集まりますからいろいろ便利な点が多いのですが、多摩動物園のアジアゾウとアフリカゾウは全然離れたところに飼われています。そうすると見るほうにとっても比較するという楽しみが一つ奪われる、管理する側にとっても似た動物がばらばらにすることで管理も不便とかいうようなマイナス面がでてくるわけです。動物地理学展示もそういう点に配慮すれば、それはそれで確かにお客さんに何を見せるのかということで新しい方法だとい

うことはわかるんですけども、なかなかそれを本当にいかしたものが出てきません。

そういう時に新しい生態学的展示ということをやアメリカの動物園が先頭に立って言い出しました。これはサンディエゴ動物園で作られている、タイガーリバーという展示です。ちょっとスライドが見つからなかったので入り口しかお目にかけられませんが、[写真4]このタイガーリバーの入り口に入っていきますと人工的に霧を作っていて、いわゆる東南アジアの熱帯雨林の雰囲気을それで作り出しています。カリフォルニアの乾いた土地で実に上手に熱帯の植物、また植物がうまくつかないときは偽木でその風景を、光景というのでしょうか、景観を作り出しています。そしてそこにトラをいれる、ニシキヘビを入れる、ワニも入れる、といったような形で生態学的な一つの演出をしているわけです。サンディエゴ動物園では、その他、コピーといって、アフリカにある火山の噴出物でできた地形を作り、そこにその地帯の動物を、クリップスプリングというレイヨウやその下のほうには、ロックハイラックスという岩だぬきという和名をもった動物とかコビトマングース、その他トカゲの仲間なんかが、同じ展示場の中に上手にお互いの間の接触のないように展示されている。この生態学的展示というものが非常に新しい方法で、お客さんにも喜ばれるということで、また動物たちもいかに自然に生活しているように見えるということで注目を集めています。

これはベルリンの動物園で見たガラガラヘビの展示です。画面の中央部のところでガラガラヘビが移動をしています。手前に荒野で行倒れになったウシが風雨にさらされて頭骸骨が残っているといったような景観を作っているわけです。

この例で、私が唯一不満を持っていますのは、ウシの頭蓋骨の眉間に丸い穴が空いております。あれはヨーロッパでは、ウシを屠殺するときに屠殺銃というのを使います。眉間に穴を空けてそこから鉄のパイプを入れて脊髄を破壊するんですね。あの丸い穴が空いてたら、これは屠場で殺された牛だということを言っているようなものですから砂漠で行倒れになった頭骸骨ではありえない(笑)。ほんとはあの穴は歯医者さんのセメントでふさいでから、あのなかに入れるべきであったというふうに思うのです

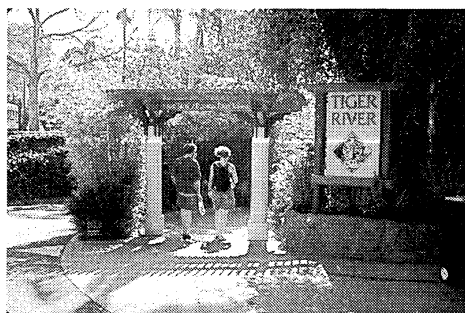


写真4 サンディエゴ動物園の
タイガー・リバーの入口

が、ま、ともかく爬虫類くらいまでは、簡単に生態学的展示は簡単にできるわけですね。

この会場に関西の方がいらっしゃるかどうかが、大阪の天王寺動物園にアイファという新しい爬虫類舎ができました。それは大阪芸大の若生先生が大変苦労して作った施設なのですが、それはもう入り口からアイファのなかをぐるっと一回り歩く、その間にお客さんにどういうことを感じ取ってもらおうか、ということで、考え抜かれて作り出されたものなんですね。私は、そのアイファをこの間見せていただいて、大変すばらしいと思いました。ただ、天王寺はこれからほかの動物舎も全部この生態学的展示で一本筋を通すんだという計画らしいのですが、はたして、そのあと高等な哺乳類になっていったときにそれが思惑通りにいくかどうか非常に疑問に思います。と申しますのは、魚や爬虫類なら生態学的展示は非常にうまくやれるだろう。しかし、高等な哺乳類になればなるほど、生態学的展示というのは実際には行けないんじゃないのか。ガラガラヘビなんかは狭い所に入れて、その景観だけを小道具でごまかせる生態学的展示はできます。私は動物園で動物を見せる、その自然環境のなかで動物がどういうふうに生活してるか、それを見せるにはそれは生態学的展示ということを考えなければならない。しかし、動物は野生でいるときは非常に広い行動圏を持っています。そのなかで生態系の一員として生きている。だから、動物園という非常に限られた空間のなかで動物を収容している、そしてそれをいきいきと動かして、お客さんにその行動を楽しんで見てもらおうとするためには、単に景観を模倣するというだけでは絶対にだめである—と思います。

一つの例として、動物園で非常に人気のあるサル山というものを考えてみます。上野動物園のサル山の写真がなくて、お目にかけられないのですが、おそらくみなさん一度は上野のサル山をご覧になっているんじゃないか。あのサル山は昭和6、7年に作られた、最初にお話しした新聞記事にあった計画の最後に作られたものなんです。偽岩工事の左官屋さんの職人の腕がすばらしくて、しかもあれは千葉の房総半島の、鋸山の岩場を真似しているんです。実にその偽岩工事が立派なんですね。日本中のどのサル山よりも、自然の岩山らしく作られています。

現在38頭くらい、多いときは60頭くらいあそこに入っているんですが、それが岩山を舞台にのびのびと遊んでいます。そのサルの行動、また個体間の関係などを見るのが非常に面白いというので人気の高い施設です。ただ、あれに対してやはり文句を言う人がいます。ニホンザルというのは樹林帯に住む動物だ、岩山にすんでいる動物ではないのに自然の岩山の風景の中で飼うというのはおかしいじゃないか、というごもっともな意見です。それでは樹林帯でニホンザルを飼ったらどうなるか。サルは当然、葉っぱをむしり、木の枝を揺すって折ったりする。余程広い樹林帯を作って、その中にせいぜい数頭のサルを入れることしかできないだろう。そうすると、サル山のサルなんてものは個体を入れ替えることは難しいですね。先に入っている群れが後から来た新参者をいじめて殺してしまう。そうすると5、6頭の小さな群れで代々飼ってかなければならない。今、上野のサル山にいるサルは、最初に入ったオス7頭、メス5頭から増えて、どんどん外の動物園に出されているのですが、現在残っている38頭かのサルは導入した最初のファウンダーという基礎畜から勘定しまして一番若いのは6代目になります。6代もの間、自然に繁殖を続けていって近親繁殖の害も見られずうまく飼っていかれているのは、ひとえにそこに40頭から60頭くらいの群れで飼っているためです。これを5頭、あるいは3頭と少数にしたら、すぐに近親交配の弊害が出てきます。こうやって見ると、実際に自然に近い環境のなかで生態的展示をしようというのはまず無理だ、ということになります。

しかし、ニホンザルは樹林帯の動物であるというクレームがつくとやはりそれを無視はできませんので、その後でできた、これは井の頭のサル山（山ではありませんが一応こういうサルを集団で飼う施設をサル山と呼びますが）ではコンクリートの偽木で林を作りました。そして、そこにニホンザルじゃなく、アカゲザルを収容しています。上野のサル山に対する非難に対して、樹林帯を思わせる構造物に変えたということです。一方、多摩動物公園のサル山は反対にあんまり岩山が自然に近くうまくできすぎたから批判をうけた。いっそのこと、意味のない抽象的な建造物に変えてしまっています。日本の動物園の中、豊橋の動物園では上野方式と井の頭方式を

両方取りいれて、岩山の部分と樹林帯の部分があります。千葉の動物園では、芝生を入れて緑を岩山のなかに持ち込み、岩山に流れを作って滝を落とすといった工夫を加えている。大阪のみさき公園のサル山では、サルが雨の日に入り込める洞穴を作って、また追われた弱いサルが逃げ込める隠れ場を作るといったような点で改善を試みる。それから、ニホンザルはスノーモンキーと英語で呼ばれますが、北半島にすむのが北限のサルだということですが、札幌円山動物園ではお正月の雪の日にもこうやって雪の中で遊んでいます。四国の栗林公園のサル山ではヤギをサルと一緒に入れて、サルと異種との間の交流を見せています。このほかにもイノシシとサルとかいくつかの組み合わせが日本中で見られています。

私の生態的展示に対する批判としては、このサル山のように生態的展示をやろうとすれば解決しておかなきゃいけない問題がたくさんある。私はこの前ある集まりでも話をしたのですが、サンディエゴ動物園にゴリラ・トロピックという展示があります。これは大変に広いゴリラの飼育場に、滝を作り、流れを作り、そしてアフリカの植栽を植え、実に上手にできている。私がそこに見に行ったときに、ゴリラがアフリカの景観のなかを自由に動きまわり、のびのびと行動しているかというところでもなかったんですね。ゴリラ・トロピックの一番奥、コンクリートの偽岩のところに寝部屋に入るドアがあります。その寝部屋のドアの前に、雄のシルバーバックの大きな個体が向こう向きに座ってじっとドアを見ている。私はその時、マービン・ジョーンズという大変動物園に詳しいおじいさんに案内してもらったんですが、そのゴリラを見てマービン・ジョーンズさんが苦笑して言うのは、実はこのゴリラは、午前中と午後、展示場に出す個体を入れ替えている、ちょうど今昼間の交代の時期で、あのゴリラはもうはやく寝部屋に入ってえさを食べたいんだ。それでドアの前に向こう向きに座りこんで動かない。ちょうど仕事を終えたサラリーマンがいよいよ5時から一杯飲めるぞ(笑)、てな気持ちでいるのと、おそらくゴリラも同じような感じを持っているんだと思います。それはそれで私には大変面白かったというか、おかしかったんですが、やはりあのくらい高等なも

のになってくるといくらアフリカの自然が自分の周りにうまく作られているとしてもですね、やはり偽木は偽木であり、偽岩は偽岩である。そしてまた、自分の行動できる範囲というものは、その運動場の限られた地域しかありえない。それは動物にとって決して本当にのびのびできる空間ではないんだと思うんですね。

今日、ここに千葉の並木さんが見えてますが、並木さんがこの間ジャージー島に行って、ジェラルド・ダレルという人が—これは作品を文章でお読みになった方、大勢いらっしゃると思いますが—ダレルの作った動物園があるんです。そこにオランウータンの放飼施設ができています。これが、自然を模倣するということには意を払ってない。ただ、野生のオランウータンが行動する、その行動をうまく引き出してみせようということにいろいろと工夫をこらした施設です。そこに入っているオランウータンは実にのびのびと動きまわっている。BBCの動物の番組で有名なアッテンボローがそれを見て絶賛したオランウータンの飼育施設だということです。ゴリラでも、今世界で一番繁殖がうまくいっているのは、イギリスのハウレットの動物園です。ここのゴリラの飼育方も、決してサンディエゴ方式、あるいは上野の「ゴリラの森」方式ではない。厚く敷きわらを敷きつめて、遊び道具といえば天井から下がったロープとか、あるいは木、そんなもので、ゴリラは自由にのびのびと野生の生活、野生の行動を再現しているということです。

これは悪い方の例で出して申し訳ないのですが、関東地方のさる動物園の類人猿舎です。オランウータンの檻も、ゴリラの檻も、チンパンジーの檻も、



写真5 ベルリンの動物園のオランウータン

彼らが野生で行動している場とは全く関係なく同一の設計で、同一の構造の檻になっている。3種類の動物の形態的な比較をしよう、それを比べて見てみようという目的なら、かえて何にも変化のない同じ檻の中に3種類というのでもいいのかもしれない。オランウータンにとってみれば、野生の時は樹上性の生活をしていた。これは同じようなコンクリートの非常に狭い運動場でしかありませんけど、ベルリンの動物園のオランウータンです。[写真5]非常に背の高い樹木を入れて樹木の間をロープで結んでいます。決して、熱帯雨林の景観を再現したというものではない。そんなものとはほど遠い。遊び道具としてタイヤがぶら下がっていたりしますが、その中に入っているオランウータンはこの中の設備をフルに使って動きまわっている。私はこういう行動学的な展示というものこそが、来園者に喜ばれる展示ではないのか、というふうに思うわけです。

要するに立体的にオランウータンは動かさねば、オランウータンらしい行動というものを見ることはできない。さらに最近、これは「スミソニアン」という雑誌から複写したのですが、[写真6]スミソニアンには類人猿の研究所があるんですね。動物園に飼われているオランウータンは研究所の研究室に決められた時間に出勤するんだそうです。出勤するときには下にたくさんお客さんが見えています。30フィートの高さに張られたロープをつたわって飼育小屋から研究室に移動をする。移動する途中には中間のステーションがありまして、そこから下には降りられないように電気の電柵が張ってあります。そこでオランウータンが一休みして、さらに研究室へとロープづたいにお客さんの頭の上を渡っていく。つまり、

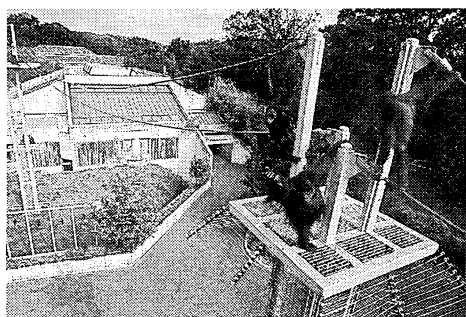


写真6 スミソニアン研究所のオランウータン

こういう見せ方もできるんだということです。

やはり類人猿のような動物、これはテナガザルですが、ミュンヘンでみたのですが、大変に高いもの、猿の姿は双眼鏡を使わないと詳しく見られません。そのくらい離れたところに猿は行っちゃうんですけども、テナガザルらしい行動というものはこの中で十分に楽しむことができる。そういう施設というもの、これから動物園というものは、お客さんにどのようにして見せるかということで考えなきゃいけないと思います。

上野は今、ゴリラの森で、9頭を集めて群れ管理をして、そしてそれを自然の形態をつくりだして運動場を管理する。一般の来園者の方に聞いてみると、ああいう自然の豊かな運動場のようなところで飼われていると、ゴリラも繁殖するかもしれませんねということと言われるんです。私はそういう、景観というものとゴリラの繁殖は、直接には絶対結びつかないもんだと思います。たとえばベルリンの動物園のゴリラ舎は、上野のかつてのゴリラ舎とさして変わらない。屋内展示室で、外に運動場はありますが、シルバークックを中心にして、実に見事な家族生活が形成されています。ベルリンの動物園は、ここで見られますように、チンパンジーから、コビトチンパンジー、ゴリラ、オランウータン、それが実に見事に繁殖しています。繁殖するには、やはり相性のいいオスメスを、ゴリラに選ばせるということです。別に自然の景観が周辺にあらうがなかろうが、そんなことはたいして関係していない。その証拠に日本でゴリラの繁殖させた動物園といえば、栗林動物園にしろ、別府ラクテンチにしろ、あるいは京都にしろ、決して飼育施設の面で優れた動物園だったとはいえないと思うんです。ただ、相性のいい雌雄をペアで飼うことができた、その巡り合いのよさ、それが成功の理由だったというふうに思います。ですから上野動物園のゴリラの森は、雄も雌も複数飼ってその中で相性のいいペアを作り出そうというところにゴリラ繁殖作戦の一番の中心がある。ただ、そうゴリラの数を増やすとチンパンジーもオランウータンもお客さんに見せるというわけにはいかない。お客さんに対するサービスは量的に減ってしまうから、質的に少し高い見せ方をしようというのが、上野のゴリラの森を作った大きな理由だと思います。

まだゴリラの繁殖といううれしいニュースは届いていませんけれども、最近京都からゲンキという大変元気なお嬢さんがやって来て、私はあのゲンキがおそらく最初の子どもを上野に連れてくるんじゃないかと期待しています。

そういうわけで、私が今日お話しした動物園の一番大事な役目は、展示をして、お客さんにそれを見せて、自然というもの、動物というものを理解してもらう、だから動物園はその見せ方というものにいちばん注意を払うべきだ、ということを今までいろいろな動物園のスライドを観ていただきながら、聞いていただきましたかったわけです。

最後にちょっと時間もありませんので簡単に付け加えたいと思うのですが、動物園は動物を保護することのために作られた施設ではない、だから動物保護に対する役割といっても、それは教育というものを通して動物保護の必要性、それをなぜ今動物園でやらなければならないのかということ、展示を通して教育的に訴えるというところに保護に対して果たしていく役割があると思っています。しかし、さっきも言いましたようにどうしても動物園で保護、繁殖をしないとイケないとなったら、隔離された、観客の視線によるストレスを無くした状況でやらなきゃならない。これは、ロスアンゼルス動物園のカリフォルニアコンドルの繁殖場です。そこは一般の来園者は入れない。私たちは、動物愛好会のグループで行きまして、そこ裏の繁殖場に入れていただきました。ただ、カリフォルニアコンドルが見える場所までは入れなかった。こういう人工孵化場で、向こうにネットが見えていますが、手前にいるのは別のコンドルです。あの一番奥にカリフォルニアコンドルが入っています。カリフォルニアコンドルは塩素系の農薬の影響で卵殻が薄くなってしまっていて、破卵が多いんです。重たいコンドルが上にのると割れてしまいます。そこで卵は全部取り上げて、取り上げるとコンドルは一定の数になるまで産み足しますから卵はたくさんになります。卵はそれを弱い殻でも破卵しないように孵卵器で大事に孵化して、数が今大変に増えて自然に戻してもいい状態になっています。まだ野生復帰は完全には成功していないそうです。ただ、人工で育てますと、インブリンティングといって雛が人間を親だと思ってしま

う。そこで、カリフォルニアコンドルの雛は、ハーブミラーといって人間の側から見るとガラスだけどコンドルの側から見ると鏡になる、そういう壁越しにコンドルの頭の形の指人形（パペット）を手だけ穴から差し込んで、えさを雛に与えます。そうするとコンドルは、人にインブリンティングされることがない。そんな苦心をして、影で動物の保護をしているということです。

あと、動物の保護を目的とした動物園の写真を幾つかお見せします。これはイギリスのスリムブリッジにある水禽（きん）協会の動物園です。あの高い観察塔で外側を見るとセバーン川の河口の砂州が見えまして、そこに冬、渡り鳥が渡ってきます。緑の広い草地にはハワイガンがたくさんいます。ハワイガンは、スリムブリッジで絶滅から救われたガンですが、野生の野ウサギがどこからか出てきて、ガンと遊んだりして大変美しい。こういうふうにはハワイガンがレストランで食事していると足元までやってきます。動物写真家の大高成元さんの写真です。それからジャジーの動物園。これも絶滅に瀕した動物ばかりを集めて飼っているのですが、これはマモセットというゴールデンライオンタマリンというタマリンの仲間です。ここで私が感心したのは、こういうふうにはゴールデンライオンタマリンが見えない檻もあるのです。檻の奥に寝部屋に通じる通路があります。ライオンタマリンが気が向かなければ外に出てこなくていいような、その代わりタマリンの部屋が複数横にずらーっと並んでいます。そうするとどこかで運動場が出てきます。こういうふうには複数檻を作っておいて別々のペアを入れておくのは、またもう一つ意味がありまして、繁殖が成功した場合に血縁関係のないオスとメスをかけ合せることができる、そういう繁殖戦略上と、お客さんに見せるのに動物の気分次第では表に出てこなくていいよ、という飼い方をしている。この2つが実にうまく組み合わせられて、いい展示だと思いました。そういう動物を守る動物園、保護をまず考えて作られた動物園ですけど、しかし、見せるということに対しては非常に工夫をしています。これはメガネグマの飼育場です。メガネグマだけがクマのなかで飼われていて、これはクマのなかでいちばん絶滅を心配される動物だからです。これは寝部屋の方から見られたもの、

それから反対側にまわりますとモート越しにメガネグマを見ることができます。しかし、これではメガネグマとの距離が遠くなってしまいますので、近くから見たい人は向こう側からガラス越しに見てる人もいます。このガラス窓を通して見れば近くから見ることもできる。それこそお客さんの好みによって見る位置を変えれば、希望に沿うことができる。こんな工夫をしているわけです。

そろそろ時間だと思いますが…。最後に一言。動物園反対論者がよくいう説に反対しておきたいのですが、動物を飼育下で繁殖して、それをまた自然にかえすということを動物園の人はよくいうけれど、あんなことはできもしないこと、自分たちの自己弁護で言っているにすぎない。いったん飼育したら自己防衛の本能は薄れてしまうから、それを野生にかえしても生きていけない。よくそういう意見を言う人がいます。確かに飼育下で保護されれば、野生で生活している動物よりは自己防衛力が低下することは確かなんです。だけど、そうだからといって絶対不可能かということそんなこと絶対にないことです。

私の友人に児童文学者の鷺尾としこさんという童話を書く方がいますが、その鷺尾としこさんが和歌山のアドベンチャーワールドという動物園で、ミーアキャットというマングースの仲間の子どもを抱かせてもらったそうです。そのミーアキャットの子どもは、親から産まれ落ちてすぐに人工保育で育てられた、つまり野生の体験っていうのは全くもっていない個体なんですね。その個体を鷺尾さんが抱いていたら、急にミーアキャットが体をきつと緊張させて空を見上げた。なんか異変でもあったのかと空を見たけど何にも見えない。でも明らかにミーアキャットは警戒している。さらにその視線の方を見上げていたら芥子粒のように小さく赤い風船が飛んでいた。ミーアキャットは、野生のときには空からの猛禽の攻撃というのは、これは非常に怖いわけです。だからそれに対する警戒心というのは、野生の本能として持っている。全然、親と一緒に生活もしていない、親から教わったわけでもなく、自分の体験で過去にそういうことがあったということでもない。ミーアキャットは明らかに小さな風船の影を捉え、それが自分にとって危険なものであれば退避行

動をとる、それは学習したことではないけれども、しかし、そういうものは確実に自分の身につけている、私はそれが本当の野性というものの力だと思っています。

家畜というものは、人間が何千年もかけて姿形まで変わってしまうくらい飼って変化させた動物です。その家畜ですら、条件が整うとオーストラリアのアナウサギにしても、小笠原島のヤギにしても、あるいは北アメリカのムスタング（再野生馬）にしても、完全に野生に戻っちゃうんです。再野生化という現象は家畜でもたくさん知られています。それなら、野生の動物の一代二代、その動物が絶滅に追いやられている原因がなくなるまで人間が飼っていて、それを戻してやる、それは絶対できないことではないはずです。その期間が短ければ短いほどいいに決まっていますけど、家畜と同じように何千年飼ったって条件さえ整えば戻せるはずなんです。ただ、そのためにはリハビリテーションの設備も必要でしょうし、いろいろと人為的なトレーニングをすることも必要だろう。それをやらないで戻せば、当然失敗するに決まっているわけです。

日本ではコウノトリ、兵庫県で保護されて数も増えてきましたし、これを野生に戻すということがおそらく近いうちに成功するんじゃないか、そうすれば日本の空に日本のコウノトリが飛ぶ姿をまた私たちが見るようになるわけです。トキは残念ながら日本では一羽しかいなくなってしまっていて、もう日本のトキはもちろん繁殖できないんですけど、一新しいバイオテクノロジーを使えば別ですが、普通の方法ではできない—しかしトキは日本に分布するのはなくなったけども、大陸にはまだ80羽ぐらい残っていますから、そういうのを人為繁殖して、佐渡なり本土なり水銀農薬の汚染の消えたところへ戻して野生化する、これは可能だと思う。中国のトキだって、日本のトキだって、ニッポニア・ニッポンには変わりありませんし、ぜひこれは日中共同で日本のトキの復活に成功させたい、それには動物園も一佐渡にトキ保護センターというセンターがありますが—それと協力して、動物園のノウハウを活かして努力をいただきたいというふうに思います。

大変長時間、ご静聴ありがとうございます。(拍手)